
守護者物語

? マン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護者物語

【Nコード】

N0281X

【作者名】

?マン

【あらすじ】

ある山に魔物が封印されている。その魔物復活を巡り、二人の最強の守護者達と謎の集団が夜の山を舞台に闘いを繰り広げる。

設定

とある場所にある、東山町は歴史ある町である。太古の昔、ここに恐ろしく凶暴な魔物が現れた。何人もの若者が立ち向かったが歯が立たなかった。そこで、ある有名な術師を呼んでこの魔物を封印してもらった。

そして、その封印を守護するために霊力の強い家が4つ選ばれ、代々封印を守護することが決まりになった。その4家とは、赤宮家、青宮家、黄宮家、緑宮家の4家である。

そして、現代までそれは続いていた。4家の中で一番霊力が強い家ほど地位が高いがそれは当主の力によって決まる。

ただし、同じ家が一番高い地位に長くいるのが、普通であまり地位は変わらない。赤宮真人の家は長い間当主に恵まれず、一番下の地位にいた。だが、それは彼の祖父までの話であり、彼の父明吉あきよしは、赤宮家の者とは思えないくらい霊力が強く、一気に二番目まで地位を上げていた。

だが、魔物復活を目論む謎の集団との闘いによって、赤宮家と青宮家の当主は重傷を負い、黄宮家と緑宮家の当主は死亡してしまっ

た。そして、次代の当主に変わったが問題が起きた。緑宮家は血筋が完全に途絶え断絶してしまい、黄宮家は子供はいるがまだ幼く当主としてはまだまだである。

しかし、幸いなことに赤宮家と青宮家の両当主は今までの当主の中で群をはるかに抜いていて、史上最強と言われている。

主な登場人物

赤宮真人

高校一年で史上最強の当主の一人。赤宮家現当主。活発で何事に

対しても一生懸命で明るい、いわゆる熱血的な高校生。青宮家の当主の悠哉ゆうざいとは仲が良い。

赤宮明吉

真人の父で赤宮家前当主、謎の集団との闘いによって重傷を負い、霊力がかかなり弱くなった。真人のことを良く理解している。歳は46歳。

青宮悠哉

青宮家現当主で史上最強の当主の一人で歳は真人と同じ高校一年。真人とは性格が冷静沈着、頭が良い。真人とは幼馴染みのような関係。

青宮重正しげまさ

悠哉の祖父で青宮家前当主。

明吉同様、謎の集団との闘いによって重傷を負うが回復力が凄まじく、明吉よりも早く治った。休みの日は、真人と悠哉を鍛えている。

平野詩織

本作のヒロイン。真人と悠哉のクラスメートでとても明るく、優しい。真人と悠哉のしていることは初めは知らないがあることをきっかけに知っていく。靈感、霊力はもともと持っている。ちなみに16歳。

神山静

東山町に引っ越して来た15歳の高校生。真人と悠哉のしていることを知っている不思議な少女。巫女の血を引いて、霊力もそれなりにある。

謎の集団

東山町に封印されている魔物復活を目論む謎の集団。主にトップ10の実力者が動いている。実力は本気を出していなかったが明吉と重正に敗れたが二人に重傷を負わせるほど。

第1節 二人の守護者

とある場所にある町、東山町。近くに大きな山があるどこにでもあるようなごく普通の町。

だが近くの山は霊が出ると有名な心霊スポットになっている。

そんなことでその山は心霊山と呼ばれている。

町の人達はその山に決して入ってはいけないと小さい頃から教えられているが、心霊山と呼ばれるようになってからは町の人達はちよつとした好奇心で山に入る人が後を断たない。

多くの人は昼間に心霊山に入るのだが、それでもやはり夜に山に入る人もいる。

そのおかげで町は夏場になると多くの人で賑わうが、それはあまり良いことではない。

そう思っているのは、町に多く神社や寺の人達である。

町に多くある神社や寺をまとめているのが、赤宮家、青宮家、黄宮家、緑宮家である。

しかし、緑宮家の当主はもういなく、血筋が完全に途絶えている。ゆえに緑宮家の神社や寺はそれぞれが独立している。

黄宮家も今のところそれに似た状況である。

今なお、まともなのは赤宮家と青宮家の両家だけである。

しかし、この宮家だけに代々伝わることがある。それは今の心霊山に長く封印されている魔物を守護する決まりである。そ

して、その決まりをまっとうしているのは、赤宮家と青宮家だけである。

赤宮真人と青宮悠哉はそれぞれ現当主である。

二人は幼馴染みのような関係でとても仲が良い。 昼間は普通

の高校生だが夜になると魔物の封印を守護する守護者として日々生活している。

朝、真人は父明吉に起こされた。

「いつまで寝ている気だ。早く起きろ。」

そして時間を見るとかなりギリギリの時間だった。

急いで着替え、台所に行く、すると

「やつと起きたか。早く食べて学校に行け。」

「あれ？親父、仕事に行かなくていいのか？」

父明吉は、「今日は、仕事は休みだ。それより今日はいつもより帰りが遅かったな。」

「なんで？」少し驚いた。霊力が弱くなったはずのに。

「こんな遅くまで寝ていたら分かるさ。大変だったのか？」

「いや別に。」

そう言うつとすぐに家を出た。

間に合うかギリギリの時間だった。急いで学校へ行った。

だが結局間に合わず、廊下に立たされた。宮家の者は元より一般人として密かに封印を守護して来たので特別扱いはされてはいない。HRが終わるとさつき話した事を教えられてもらい、教室に入った。

すると「これで何回目、遅刻するの？」と詩織が言ってきた。

「しょうがないだろ。」

そう言うつと悠哉を見た。俺より家が遠いのによく遅刻しないな
あと思う。悠哉は今まで一度も遅刻をしていない。

なんとか、午前の授業をやり過ぎ、昼休みになる。

とたんに多くの生徒が購買へ向かう。安くてうまい数量限定のパン目当てである。もちろん、真人もその一人である。

だが、一度も食べたことない。今回はいつもより早かったが売り切れてしまい、またしても食べることが出来なかった。

仕方なく残っているパンを買い友人と一緒に食べた。いつもなら悠哉と食べることが多いが今日は見つからなかった。

教室に戻ると悠哉は窓から心霊山を見ていた。

真人に来たことに気がつくつと「今日も大変になりそうだぞ。」と言ってきた。「何かあったのか？」

「今日も人が多く山に入っているからな。」

悠哉は山に入るとすぐに分かる。それは青宮家だけが持っている不思議な力で、青宮家が長い間一番上の地位にいた理由だ。

だが、真人はその力と別の同等の力を持っている。

この二人は歴代当主最強の力を持っていた。

山に多く人が入ると悪魔や妖怪が引き寄せられるように集まってくる。

ただでさえ封印されている魔物に引き寄せられてくるというのに、人が入るとなると大変である。それにこのところ急に数が増えて退治するのが大変だった。

小さくため息をつき、「もう勘弁して欲しいよ。」と言うしかなかった。

するとそこに「なに話しているの？」と詩織がやって来た。

このことはあまり人に知られてはならないので、「いや、今日も良い天気だなあって話してただけだから。」と誤魔化した。

「ふうーん。それにしては呆れたような顔していたけど？」

困って悠哉を見ると「真人は良い天気で胴着を着るとまた暑くなると言っていたんだ。」

真人は剣道部に所属して中学生の時、全国一位になったことのある実力者だった。

「まあいいや。そういえば悠哉君、部活の方はどう？」

「ああ、良い調子だよ。」悠哉は弓道部に所属している。中学の時は、弓道部はなかったので、全くの無名だが、この前見た限りかなり上手い。

その時、午後の授業の始まりのチャイムがなり、自分達の席に座った。

午後の最後の授業の終わりのチャイムが鳴り、ようやく放課後になった。そしてみんな、自分達の部活に行くのであった。部室に行くすでに数人の先輩と友人がいた。

先輩に挨拶をして、友人達のところに行った。
そして、着替えて道場に向かった。

道場に着くと先生がいて部長と話をしていた。
部活が始まる前に話があるとみんなを集めた。

今週末他校と練習試合があると言った。

高校一年の真人達も試合をするらしい。真人達にとって高校初めての試合だった。

今日明日は基礎をやり、金曜に打ち合いをして、週末に臨むらしい。

その日は基礎を徹底して終わった。床磨きを済ませ、着替えて弓道部へ行くとまだ部活をしていた。

悠哉と一緒に帰ろうとしたが守護者の仕事があるので待たずに帰った。

家に帰ると母さんが帰ってきていた。

もう夕飯が出来ていたが先に風呂に入りたかったから後にした。

風呂に入ると一気に疲れが取れた。

風呂から上がると、ちょうど準備が出来たところだった。三人で夕飯を食べた。

「真人最近どう？」

「別に普通だけど。」

多分仕事のこと、あまり心配されるのもあれで当たり障りのないように言った。

「本当に？ならいいけど。」

「そういうばさつき重正さんから今週は必ずこいと伝えてくれと言っていたぞ。最近サボっているそうだな。」

「ただ、行くのがめんどくさいだけ。」

「ちゃんと行っておけ、重正さんから教えてもらえるなんて光栄なことだぞ。」

「はいはい、ちゃんと行きますよ。」

そう言い真人は自分の部屋に行った。

まだ時間があるからゆつくりしたかったが宿題があることを思い出しすることにした。

数時間後宿題はぜんぜんはかどらなかった。そろそろ仕事の時間なので宿題を中断した。

支度を済ませ、剣を持って山に向かった。

おそらくまだ時間が早いせいかわりは静寂に包まれている。とりあえずゆつくりしていようとしたが、突然悠哉が現れた。 「今日は早かったな。」

「まあ家にいてもなんかな。」

その後しばらく二人で話をした。

「そろそろ行くか。それじゃ先に行っているからな。」

そう悠哉は言うのと先に行ってしまった。

魔物は結界によって封印されている。結界は五カ所あり一つは魔物その物を封印している大結界。 残りの四つは大結界を支えている小結界。大結界は非常に堅くどんなにやっても結界に傷がつけば凄い程強い。

しかし、小結界がすべて破壊されてしまうと大結界はとたんにもろくなってしまう。小結界はそこそ堅いが何回も力を加えると壊れてしまう。

守護者の仕事は小結界を修復し、大結界を守護することである。

本来なら二人が修復し、もう二人が守護するのが普通だが、今守護者は二人しかおらず一人が修復、もう一人が守護するしかない。

だが、彼らは難なく仕事をまっとうしている。

彼らは修復力、戦闘力が共に凄まじく一人でも修復をすることができる。 今日には真人が修復してから悠哉と合流することになった。

真人は修復していると何か違和感を感じた。

「これは。」

そう見事にわずかにもろくなっているとところを正確に壊されていた。

残りの三カ所も同じだった。昨日は悠哉が結界を修復していたはずなのに真人は修復し終わると強力な霊力で結界を覆った。さつき修復した結界も強力な霊力で覆った。

そして急いで悠哉と合流することにした。

悠哉と合流するとまだ悪魔達は襲撃してきていないようだった。

悠哉に結界のことを話そうとしたときだった。

悪魔達が襲撃してきたのだ。

真人は鞘を払い剣を出し悪魔達を斬っていった。悠哉は霊力

で弓と矢を作り、次々と射ぬいていった。

闘いはそう長くはからなかった。あっという間に襲撃してきた悪魔達は全滅した。

「そう言えば、真人何を言おうとしたんだ。」

一息つき、「悠哉、昨日結界を修復していたのお前だったよな？」

「そうだけど、それがどうした。」

そう悠哉は珍しく不思議そうに言った。

「実は結界のもろい部分が見事に壊されていた。とても悪魔や人がやったとは思えない。」悠哉は少し考え、「お祖父様に言ってみる。」と言い

「俺も親父に言ってみるか。」と真人も言った。

もう空は明るくなってきたので、とりあえず帰ることにした。

第2節 来訪者

仕事から帰るとあまり寝ている時間がなかった。親父は起きるか見てみるともう起きていた。「おはよう。寝なくても大丈夫か今日帰ってくるの遅かったみたいだけど。」

「いや大丈夫。それより気になることがあったんだけど。」

そう言うとき明吉は、少し表情が変わった。

「それで気になることってなんだ？」

「実は、悠哉が修復した結界のもろい部分を正確に狙って壊されていたんだ。」

明吉はやはりという顔をした。

「また奴らが動き始めたか。」

「親父、奴らつてもしかして。」

少し嫌な予感がした。

「そう、父さんと重正さんに重傷を負わせ、黄宮家と緑宮家の前当主を殺した奴らに間違いないだろう。」 嫌な予感が当たった。

「そのことは悠哉君は知っているか？」

「一応話しておいた。」

「そうか、これさら一層大変になるぞ。とにかく今日の朝も父さんが作るから真人は少し寝ていなさい。」

そう言われ少し寝ることにした。

しかし、なかなか寝ることができなかった奴らのことを考えていた。

（もし仮にそうだとしたら俺ら二人でどうにかなるのか。後で悠哉にも聞いてみるか。）

だんだん眠くなりいつの間にか寝ていた。

そして誰かに起こされた。なんとおこしたのは父明吉でなく母和江の方だった。

「あれ、親父は？」

そう言い起き上がると

「もう仕事に行ったわよ。早く食べて学校に行きなさい。」

制服に着替え、居間に行き朝食を食べていると、
「母さん先に仕事に行くから後、お願い。」

手で合図すると行ってしまった。

朝食を食べ終え食器を浸し家を出た。

外に出たとたん強力な霊力を感じた。悠哉の霊力でないのはすぐ分かった。今まで感じたことのない力だが邪気のない力なので心配しなかった。

登校しながら、こんなふうに登校するのはいつ以来かと思っていた。

最近守護者として忙しく朝はいつも急いでいた気がしていた。
すると校門のところではちょうど悠哉と会った。

「朝何か感じたか？」

「ああ、今まで感じたことのない力だが特に問題ないだろう。」

「一応気をつけていた方がいいだろう。」

それきり会話が止まってしまった。

教室に着くと何か騒がしかった。何かあったのだろうか？

すると詩織が

「ねえねえ、知ってる今日うちのクラスに転校生が来るんだって。」

（へえこんな時期に転校生ねえ。）

入学からまだ数ヶ月しか経っておらず、早い転校だなあと思っていた。

HRが始まり、その転校生が紹介された。

名前は神山静、何でも親の都合でここに引っ越して来たらしい。
クラスの男子はみんなおおはしゃぎだった。

見た目は良いが真人はあまり良いとは思わなかった。

普通の人間と何か違う感じでしたからである。

HRが終わるとさっそくその子は女子の質問攻めにあっていた。

楽しそうに答えていたが本心はぜんぜん楽しそうではなかった。
午前中の授業はほとんどともに受けておらず外ばかり見ていた。
昼休みになると悠哉が珍しく誘ってきた。どうやら今日関係の話らしい。　　購買でパンを買い屋上に行った。

幸い誰もいなかった。

「お祖父様は奴らだろうって言ってた。お前の方は。」

あげパンを頬張りながら「お前と同じだったよ。」と答えた。

「悠哉はどうにかしようと思っっているのか？」

「当たり前だろそれが俺たち守護者の仕事だろ。」　「ああ、そうだな。」

やはりさすが悠哉だなあと改めて思った。

「だがこれから技を磨いていかないと駄目だな。」　あまり気乗りはしなかったが、しょうがないことだった。相手は経験が間違はなく俺らよりも上。　おまけに人を殺すことをためらわない。実際に黄宮家と緑宮家の前当主は奴らに殺されている。

そう考えていると悠哉が「それともう一つ、朝感じた力、あれは多分神山さんの力だと思う。」と言ってきた。

「はあ、何言っているだよ。」

いきなり意味の分からないことを言われ、言った。

「彼女どうも普通の人と違う感じがして、午前中ずっと力を探っていて、朝感じた力と似ていたんだ。」

悠哉も気づいていたのか、おまけに彼女の力を探っていたとは。

「お前よくそんなことができるなあ」と聞くと

「いやいつの間にか出来るようになっていた。」

やはり青宮家は気配を感じるのに長けているなと思った。

「とにかく山に入らないように言っておく。力の者が入ると大変そうだし、なにより奴らが来るかもしれないからな。」

悠哉は奴らと言うと表情が変わった。

「確かに、仕事中に人がいると集中できないからな。」

そして、教室に戻ると後ろから声をかけられた。　「あのー、

少しいいですか？」

振り向くと神山さんだった。

「いいですよ。」

そう言うとき悠哉は屋上に誘った。

「何の用ですか？」

悠哉が聞くと神山さんは「あなた達からどうぞ。私に聞きたいことがあるんじゃないの？」

どうやら彼女も気づいていたらしい

「それじゃ聞くがあんた何者だ。」

「私は巫女の血を継ぐ者神山静よ。他に聞きたいことは？」

巫女の血を継ぐ者と聞いて力が分かった。

「ないが決して山に入らないでほしい。それだけだ。」

「私が何でここに来たか教えてあげましょう。番界から行くように命令されたから来たのよ。」

番界とは、靈感や霊力のある人や異能者が組織的に集まり、自分達と同じ力のある人を助け保護したり、危険と判断した心霊スポットを浄化したりというものである。主に霊や悪魔関係を相手に仕事をしている集団である。今回のようにその土地の能力者の応援に人を向かわせることもしている。

宮家の者も一応番界のメンバー名簿に入っている。

ただし、能力のある全ての人を把握できていないため常に調査員を全世界に派遣している。

いわば、非公式の国際集団だが公式に援助している国もある。（主に発展途上国）

本部は各支部長とそれ以上の幹部しか知っていない。

「私はあなた達と協力して魔物の封印を守るように命令されたわけ今日からよろしく。」そう言うとき彼女は教室に戻っていった。

「番界の情報網はすごいなあー、奴らが動き始めたなんてもう気がつくなんて。なあ、悠哉。」

「いやここは魔物が封印されているんだ。彼女の他にもいるか、

増援をよこすだろう。」

ちょうど教室に入るとチャイムが鳴り出した。

（番界かあ、最近忘れていたなあ。）

真人はそう思いながらまた外を眺めていた。

放課後になり部室にむかうとクラスの違う剣道部の友人が話かけてきた。「なあなあ、お前のクラスに転校した子、どんな子だった？」

「どんなって。うーん、まあ可愛い子だった。」

「あれ？お前もしかして興味ないのか？」

話しているとクラスメートが話に入ってきた。

「お前と青宮悠哉、あの子と一緒に屋上に行ったよな？何を話していたんだ？」

「まじか、もうそんな関係になったのか。」

「いや、彼女は青宮悠哉に用があつてこいつはおまけかもしれないぞ。」

「そっちの方があり得るな。青宮悠哉つて頭が良くてスポーツ万能で格好いい。もう女子全員、彼にホレているらしいしな。だけど何か近づきにくいって感じがする。お前達よく一緒にいるよな？」

「まあ幼馴染みみたいな関係だからな。てゆうか部室に着いたぞ。」

（あいつ周りからそんなふうに見られていたのか。）

部活は昨日と同じようなメニューだった。

今日は悠哉も帰らずに友人と帰っていた。

馬鹿話をしていると後ろが賑やかなので振り向くと悠哉の周りに女子がたくさんいた。

「やっぱり青宮悠哉つてモテモテだなあ。」と友人が羨ましそうに言った。家に帰ると母さんだけがいて、夕飯を作っていた。

「あれ？親父は？」

「ああ、何でも用があつて青宮さんの家に行ったわよ。」

「ふーん」

だが、明吉はすぐ帰ってきた。

「真人、これを肌身離さずつけている。」

「親父これは何？」

ペンダントのような物で小さな赤い結晶みたいな物がついていた。これは、小結界を父さんが霊力を使って結晶化させた物だ。大結界をいつも通り守り、お前の霊力を高めてくれる。」

「ありがとう。それより親父は霊力使っているのか？あんまり無理するなつて。」

実際親父は、かなり無理しているのが分かる。

「少し休んできて。」

「ああそうさせてもらう。小結界のダミーの修復はちゃんとやれ。」

「分かったから早く休んできて。」

明吉は、和江に付き添われ寝室で横になった。

その後、真人は仕事があつたので一人で夕飯を食べた。

寝室を見ると明吉は静かに休眠をしているのを見て、真人は安心した。

真人は着替え、仕事に向かった。

真人がいつもの場所に行くと悠哉が誰かと話していた。

「おう悠哉、誰と話しているんだ？」と言うと神山が現れた。よく分からないが巫女らしい服装だった。

「遅かったわね。」

やつぱり来たかため息をつくと、

「なにため息ついているのよ。」とおこられた。 「いや、なんとなく。」

そんな状況を見越したのか、悠哉が間に入った。 「とにかく、今日は俺が修復する番だから神山さんを案内しながら行くよ。」

「オッケーちゃんと覚えさせろよ。山の中でまよわれたら困るかな。」

そう言うとき真人は先に行った。

「大結界はなんともないか。」

山はいつものような静けさに包まれていた。

「久々にやってみるか。」　そう言い集中力を高めて詠唱をはじめた。

「神よ、邪の者の迷わせ、貴方の僕を守る力を与えよ。そして、我らに幸福を。」

しばらく静寂が訪れた。　真人はまだ集中している。しばらくしてゆっくり目を開けた。

「ふう、出来はまあまあつてところかな。」

それから真人は地面に印を書き始めた。

それを終わると気を休めて空を眺めていた。

悠哉はこの山のことを全く知らない神山と一緒になのでまだ来ていなかった。

夜が一層深くなると物音がした。そしていつでも剣を抜けるように身構えた。

そして悪魔達がやってきた。昨日よりも数が多かった。一人で相手するには厳しい。

だが真人は笑っていた。　悪魔達は一斉に襲いかかったが見えない壁にぶつかった。

それは真人がさつき造った結界だった。真人は大結界の周りを自分の造った結界で守っていたのだ。

悪魔達は何度も結界を攻撃して来ている。

「しばらくはもつかな。」　だがあつという間に結界は壊れ悪魔は真人を狙う。

真人は剣を抜くと悪魔達に斬りかかった。

多勢に無勢とよく言うが今この状況は多勢は無勢と言ったところである。　ただいくら真人の敵ではないといっても、なかなか数が減らない相手に真人は疲労してきていた。　そして真人は囲まれてしまった。

その時、雷が悪魔達に落ちて来た。

「けっこうボロボロじゃない。」と神山が笑いながら来た。

そして次は矢の雨が悪魔達に降り注いだ。

「なんだ今日はかなりの数だな。」と悠哉が現れた。

「遅いじゃねえか。」

「神山にいろいろ教えてあげていたんだからしょうがないだろう。」

そして三人で一気にかたずけた。

「真人もう帰っていいぞ。あの数相手に一人で頑張っていたんだから疲れているだろ。早く帰って休め。」

「いや、もう少しいる。」「じゃあまり無理するな。」

そして、明るくなってきたので先に帰らせてもらった。

今日はかなり無理した気がしていた。

第3節 発覚

真人はいつもより早く帰ることができたが、ひどく疲労していた。なんとか家に着き着替えて寝た。

一方その頃悠哉と静はまだ大結界を守護していた。

「もう帰ってもいいんじゃない？ 明るくなってきたいるだから。」
静は眠たそうに言った。 「そうだなそろそろ終わりにして帰るか。」

「それじゃお先に。」

悠哉も帰るとした時、遠くで邪悪な強い力を感じた。そして、大結界に強力な魔よけを施し帰った。

「さすが青宮家当主。こんなに離れていても私の気配を感じることができるなんて。」

（あれ？ なんで俺まだ山の中にいるんだ？）

真人は気がつくといつも仕事をしている夜の山にいた。

辺りを見渡すと誰かが山に入ってきた。

（おい、なんであいつが入って来ているんだ？）

山に入ってきたのは真人のクラスメートの詩織だった。

（なにやっているんだ。早く山から出ていけ。）

しかし、真人の声は聞こえていないみたいで詩織はどんどん大結界の方に歩いて行く。

詩織の目はいつもの目ではなくまるで操られているかのような目だ。

（待て、詩織。）

「詩織―」

真人はようやくさつきまでののが夢だと分かった。　「夢か。でも今のは一体何だったんだ？」

時間はまだ6時だった。寝る気がしないのでとりあえず起きた。窓を開けると外は雲一つなかった。

「もう少しで夏か。」

そう言う。制服に着替え居間に行く。

「おお真人今日はやけに早いな。」

父明吉が驚いた様子で言った。

すると台所から来た母和江が

「そういえば真人あんたさつき詩織ちゃんの名前を言っていたけどどうしたの？」

と和江が聞いて聞いてきた。

「べ、別に。」

それから何を聞かれても無視した。

「ごちそうさま。」

そしてすぐに家を出た。少し歩くと

「あれ？どうしたのこんな早く登校するなんて。」　慌てて後ろを振り向くと詩織がいた。

「一緒に行こう。」

「ああ別にいいけど。」

そう言い一緒に登校することになった。

「なんか久しぶりだね、二人で話すの。」

「そうか？」

「そうだよ、真人、高校に入ったらいたい悠哉君というじゃん。」

確かに高校に入ると同じくらいに当主にさせられて悠哉とその話ばかりしている。

「そうだったな。そういえば詩織、部活はどうなんだ？」

「うん。楽しくやっている。」

教室に着いてもずっと二人で話していた。

HRが始まった。

そこで初めてまだ悠哉が来ていないことに気がついた。

悠哉は一限が始まるギリギリに来た。

どうして遅れたか聞きたかったが授業が始まってしまい聞くことができなかった。

授業が終わるとすぐ悠哉に話しかけた。

「珍しいなお前が遅刻するなんて。」

だが悠哉は何か考え事をしているようで、返事がなかった。

「真人お前今朝、詩織が大結界の方に歩いて行く夢を見なかったか？」

突然だったので少し驚いた。

「じゃあお前も見ただのか。」

「ああそうだ。あともう一つ。奴らの内の一人が遠くだったがい
た。近いうちに始まるかもしれない。」

そして、授業開始のチャイムが鳴った。

（奴らが遂に来たか。）

その日は時間の流れが早く感じ、あっという間に放課後になった。
部活は明日が試合なので軽く打ち合いをして終わった。

部活の外に出ると詩織が待っていた。

「ずっと待っていたのか？」

「ううん、たまたま近くに来たから待っていただけ。」

「そうか、ありがとう。」そして、二人で帰ることになった。

誰も近くにいないとなると「ねえ、真人と悠哉君って夜遅く何や
っているの？」

「えっいや何もしていないけど。」

「じゃあなんで二人共最近眠たそうなの？」

「それは……。」

真人が迷っている

「そう。私が信用できないのね。じゃあね。」

と詩織は行ってしまった。走っていく時、詩織は泣いていた。しかし、本当の事を話すことはできなかった。

家に着くとすぐに部屋に入り横になった。

（詩織に悲しい思いをされてしまった。）

そう思い、電話をしようとしたがかける言葉が思いつかなかった。ずっと詩織のことばかり考えていて親とも話さなかった。

しかし、さすがに仕事の時間まで落ち込んでいけないので、とりあえず仕事を終わらせようと思った。

その頃詩織は公園で泣いていた。

親には今日、友達の家に泊まるとメールをした。するとどこからか声がした。

「あの二人がしている事が知りたいか？」

「誰？」

詩織は辺りを見たが誰もいない。

「どうなんだい？」

「知りたい、教えて。」 「いいだろう、では連れて行ってやる。」

そして、詩織は意識が遠退いていくのが分かったが目の前が暗くなった。真人はいつも場所には行かず、すぐ小結界の修復に向かった。どこも異常はなく、そんなに時間はかからなかった。

大結界に行くとき悠哉と静がいた。

「よう！」

と真人が声をかけた時、後ろで気配を感じ、後ろを向き間合いをとった。 「詩織？なんで山の中に来た。」

全く聞くていないようで顔がうつむいたままだった。

次の瞬間とんでもない事が起きた。

詩織は顔を上げると悪魔のような笑みを浮かべ笑うと真人に襲いかかった。

「どうしたんだ、詩織？」　そう言い、みぞおちに一発いれ、気絶されて悠哉に憑いている悪魔を抜うようにお願いした。

「太陽のような光、そして幸福を与えよ。」

そう言うのと詩織の体から悪魔が出ていくのが分かった。

「ふふふ、さすが守護者。憑いていた時間が短かったとは言え、よく私を抜うことができたね。」

「お前は何者だ。」

真人は怒り強い口調で言った。

「私はサタナキア。よく覚えていてね。」

そう言うところかへ行ってしまった。

「真人。気を緩めるな悪魔達が来た。静、詩織を頼む。」

次の瞬間、悪魔達は現れた。今日もなかなかの数で今までよりも少し手強い。

真人は静の方を見た。

静は、白い狼を二体召喚し、詠唱で詩織を守っていた。　その時、詩織が目をさました。

「神山さんここはどこ？」

どうやら憑かれていた時の記憶はないようだ。

詩織は真人と悠哉を見て驚いた。

二人は襲ってくる悪魔を倒していた。

静を見ると何か唱えているのが分かった。

「みんな」

詩織はただ見ていることしかできない自分が悔しかった。

しばらくすると悪魔達はいなくなった。

「みんな大丈夫？」

詩織は心配してみんなに聞いた。

「ああ平気だ。」

「大丈夫だよ。」

「平気よ。」

どうやらみんな大丈夫みたいだった。

その時、木の陰から詩織を狙って悪魔が出てきた。

真人はいち早く気づき守ろうと斬りかかったがかわされ、腕をかすった。すぐに悠哉が仕留めた。「真人ごめん。」

「気にするな。」

詩織は真人の腕の傷に手をかざすと傷が直っていった。

「詩織、お前」

詩織は自分でも分からなかった。

「まあいいじゃないか。詩織もう決してこの山に入ってくるなよ。」

「

悠哉は心配そうに言った。

「いやだ。私もみんなと一緒に闘う。」

「でもな詩織」

「いんじゃないね。治療能力は必要だからな。」

真人は反対しなかった。悠哉は悩んでいたが

「はあ、しょうがないか。ただし真人詩織とお前が組め。俺は静と組む。当番はいつも通り日替わりってことでいいな。」

「おし分かった。ってことでよろしく詩織。」

「うん、よろしく。」

「よし。じゃあ帰るか。」「真人お前今日来るか？」と悠哉

が聞いてきた。

「ああ部活が終わったら行くから。」

「じゃあ待っているからな。」

そして、みんな帰ることにした。

真人は詩織を家まで送ることにした。

「ごめんね無理言っちゃて。」

「別に。それよりこの事黙っていて悪かった。」

「ううん、もういいよ。多分聞いただけじゃあ私、信じなかったと思う。それよりごめんね試合があるっていうのに送ってくれて。

試合頑張ってたね。」

そう言って家の中に入ってしまった。

（絶対に守ってやるからな。
そう誓い真人は帰っていく。）

第4節 それぞれの休日（前書き）

なかなか更新しなくてすみません（x|x;x）

学校や部活が忙しくストーリーが考えられずにいました。（被魔

師の方に意識が行ってしまったからかもしれない。）

ちゃんと両立できるように頑張ります（|_|）

第4節 それぞれの休日

真人は詩織を家まで送ると、あの悪魔のことを考えていた。

（あのサタナキアっていう悪魔は一体何者なんだ？）

一方、とある場所では悪魔達が集まっていた。

「どうだったサタナキア。守護者の实力は。」

「どちらもなかなかの实力だったわ。あと、一人知らない子がいたけど大したことないわ。」

「まあよい。しばらく様子を見ておきましょう。」

真人は今、剣道部の練習試合の会場にいた。

「おい、真人大丈夫か？すごく眠たそうな顔しているぞ。」

「ああ大丈夫」

「ならいいけど。」

組み合わせが発表されて真人は上級生と同じところに入った。

「さすがだなあ、いきなり上級生とやるなんて。」

「頑張って一位になれよ。」

「もちろんやってやる。」

真人は余裕で言った。

一方その頃、悠哉は自分の家の道場にいた。

数メートル先には藁人形わらがいくつも立ててあった。

悠哉は藁人形めがけて矢を放つ。

矢は確実に人形の中心を射抜き穴が開いていた。

「ふうー」

悠哉が息を吐くと父重正が入ってきた。

「だいぶ良くなってきたな。で、わしに教えてほしいものとは？」

「はい、秘技を教えてください。」

重正はやはりかという顔になった。

「いいじやろう。ただし厳しい修行になるぞ。」

「それは分かっています。それでも教えてください。」

そして、悠哉は秘技を教えてくださいることになった。

真人は難なく二回戦を突破していた。

「スゲーな余裕で三回戦進出じゃん。」

「まあな。」

しかし真人はあまり嬉しそうではなかった。

なぜなら次の対戦相手は相手高校の中堅だから油断はできない。

たとえ勝ててもおそらく次は相手高校の副将で、その次はなんと真人の高校の剣道部部长で、厳しい組み合わせだった。

そして、三回戦目が始まった。

相手はなかなか隙を見せず打ち込みにくい。

だがいつまでもこうしては仕方がないので先に仕掛けてみた。

当然相手は反撃をしてきたがなんとかかわした。

またにらみ合いが続いたが今度は相手が仕掛けてきた。

真人は相手の隙を見逃さず、なんとか一本取ることができ試合に勝ち、準準決勝に進出した。

そして真人の次の相手が決まった。

予想通り相手高校の副将だった。

試合が始まったとたん相手から異様な感じがした。

だがそれは悪魔だとすぐに分かった。

しかし、今はどうすることもできずただ試合を続けるしかなかった。

相手からはものすごい殺気がしていた。

普通だったらまともに動けないだろうが真人は悪魔と毎晩闘っているのもう慣れていた。

そのせいかさっきの試合よりも楽に感じた。

勝負は真人があっさり一本取って終了した。

ついに次は部長と対戦だか少し休憩時間が設けられた。

「遂に準決勝に進出したな。本当に優勝しちまうんじゃないの。」

「いやさすがにそれは無理かな。次は部長と対戦だから多分勝てないな。」

真人達の部長は中学生の時、新人戦で準優勝、二、三年の全国大会一位の超実力者で国大に出場したこともある。

おまけに去年まで中堅として一年からチームのレギュラーだった。

「ちよつとごめん。」

真人は相手高校の副将を探しに行った。

（多分、あそこだな。）

暗い倉庫の中に人影があった。

そう、相手高校の副将だった。

「くそ、くそ、くそ――――」

すると角と尻尾が生えた。

「ユルサナイ、ゼツタイニ。」

「やっぱりここか。」

真人が倉庫の入り口のところにいた。

「そつちから来てくれたか。」

「良かった、まだ自我は残っているみたいだな。」

「主よ、光を求める者に聖なる光を」

「ダメレ、コノクソガキガ。」

悪魔は真人めがけて突進してきたが真人は足を引っかけ、相手のバランスを崩し両手を掴みながら詠唱を続ける。

「光を拒む者には裁きの光を与えよ。」

真人がはつきりとした言葉で言い終えると悪魔は完全に退治された。

「さてと」

副将を光の当たる場所に出し、浄化措置を施した。

真人が会場に戻ろうとすると今までに感じたことのない魔力を感じた。

気のせいだと思い、会場に戻った。

「確かになかなかの実力だな。」

会場に戻るとちょうど休憩時間が終わり、再開となった。

「真人頑張れー」

「部長、一年なんて軽くひねっちゃってください。」

両者の応援が飛び交う中

「部長、よろしく願います。」

「ああお互いいい試合をしよう。」

そして試合が始まった。

やはり部長の方が優位で真人は押されている。

しかし、真人も頑張って耐えている。

（よし、今だ！）

真人がすばやい小手打ちをするが、真人は裏をかかれ面打ちを食らい負けてしまった。

「やっぱり部長にはかないません。」

「いや、なかなか勝負だった。負けるかもしれないと思ったぞ。」

両者に拍手が送られた。

決勝戦は真人達の部長が勝ち優勝した。

「部長おめでとございます。」

「やっぱり部長はすごいですね。」

解散しても話題が尽きることはなかった。

「真人も部長とほぼ互角の勝負で凄かったな。」

（部長は本当に負けると思っていたのだろうか？）

「おい、真人聞いてるか？」

「あ、ごめん。聞いてなかった。」

「じゃあな。」

「ああまたな。」

真人は家に帰ると悠哉の家に行く準備をして出かけた。

悠哉の家に着くと5時過ぎだった。

「こんにちはー」

「あらあら真人君。」

「どうも。あのー、悠哉は今どこにいますか？」

「悠哉ならまだ道場にいたと思うけど。」

「ありがとうございます。」

真人はさっそく道場に向かった。

道場からは矢が放たれる音がしていた。

「まだまだ弱い。もっと強く。」

「ちゃんと狙え。」

「また弱くなってきたぞ。」

重正さんは真人がいることに気づくと

「すまないが少し待っていてくれ。」

そして、一時間後

「待たせたな、入ってこい。」

入り口ではかなり疲れた様子の悠哉と入れ違った。

「よしそれではお主の修行を始めるか。」

「よろしく願います。」

「では初めにお主の今の实力を見させてもらおう。遠慮はいらぬ。」

本気でこい。」

真人は木刀を構え、重正に斬りかかった。

しかし、見事にかわされ足を引っ掛けられ、少しバランスを崩しかけた。

そんな事が数十分くらい続いた。

「ハアハアハアハア」

「なかなかやるが正確性に欠けているぞ。」

「分かりました。」

「それでは、今から正確性を上げる修行を中心にやっていくぞ。」

それから数時間、真人はヘトヘトになるまで修行をした。

「今日はこの位にしておくか。仕事に支障が出ては大変じゃからな。」

「ありがとうございます。」

（しっかりしているな）

部屋に行くと悠哉は何かの書物を読んでいた。

「ああ真人、お前も絞られたか。」

「お前のじいちゃんきつくないか。」

その後は二人で世間話をしていた。

「そろそろ行くか。」

「そうだな。」

準備をして山に向かった。

「あつ、俺詩織を連れて行くから先に行ってくれ。」

詩織は家の前にジャージ姿でいた。

「あつ真人やっぱり来てくれたんだ。」

まあ仕方ないと思い一緒に山に向かった。

「ねえ今まで真人と悠哉君の二人でやってきたの？」

「まあ高校に入ってからだけどな。」

二人は大結界の前にいた。

しばらくして、悠哉と静も合流した。

「今日も来ると思うか？」

悠哉は聞いてきた。

「分からないができれば来てほしくないな。」

その日は仕事を始めてから最も楽な夜だった。

「今日はやけに手応えがなかったな。」

「ああそうだな。」

「やはり試してみるか。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0281x/>

守護者物語

2011年11月12日11時33分発行